

Art Brut Then & Now 2021

LETTERS
かきまどける
文字
Tangling / Untangling

Art Brut Then & Now 2021

アル・ブツェーゼン&ナー2021

ARTSUT - ZEEN & NOW 2021

LETTERS あ、ま、と、ける 文字たち Tangling Untangling

松	西	西	富	新	ハ	佐	喜
本	山	川	塚	城	ラ	久	舎
⊕	友		純	千	ト	⊕	埜
三	浩	匠	光	太	ユ	初	也
				平	カ	一	
					ス		

KISHABA Motiya, Sakuta Yuichi,
Harada TOFFERS, SuiNo Senna,
TOMIZUKA Yoshimitsu, NISHIKAWA Takumi,
NISHIYAMA Tomohiro, MATSUmoto Kunizo

ごあいさつ



東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、「アール・ブリュット ゼン&ナウ 2021 レターズ ゆいほどける文字たち」を開催いたします。

「アール・ブリュット ゼン&ナウ」は、国内外のアール・ブリュットの動向において、長く活躍を続ける作家と、近年発表の場を広げつつある作家を、さまざまな角度から紹介する展覧会シリーズです。

第1回目にあたる「レターズ ゆいほどける文字たち」では、文字に魅了され文字にとりつかれた8名の作家を取り上げます。その作品には、音や意味、形などへの興味から始まる、それぞれの作家の文字への執着が映し出されます。たとえばそれは、気に入った文字の繰り返しであったり、記憶の中の情景や関心を寄せるものを表す説明であることもあれば、独自の書体による日記や壮大な自作の物語、あるいは、愛しい人への手紙として現れることもあります。作家の手の跡が色濃く残る文字は、画面上で重ねられるなかで、音や意味から解き放たれて、ただの線や点になります。しかし、すぐにまた、手放したそれらをまとめて文字へと戻っていきます。

くり返し結んではほどける文字たち。本展では、その書かれ、描かれた世界へご案内します。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました作家の皆様、本展の実現のためにご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

2021年3月

(公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館
東京都渋谷公園通りギャラリー

会期 2021年3月13日(土) - 6月6日(日)

会場 東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1、2

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

※本展は、当初は1月23日(土)から3月21日(日)までの会期で行われる予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館等により、上記の会期へ変更、実際の開幕は4月1日(木)となった。

Exhibition Period: Saturday, 13 March 2021 - Sunday, 6 June 2021

Venue: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Galleries 1 and 2

Organizer: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

*Although originally scheduled for Saturday, 23 January to Sunday, 21 March, this exhibition has been rescheduled (see date above) due to our temporary closure in response to COVID-19, and officially opened on Thursday, April 1.

凡例

- 本書は、東京都渋谷公園通りギャラリー 展覧会「アール・ブリュット ゼン&ナウ 2021 レターズ ゆいほどける文字たち」の出品作品を掲載している。
- 編集にあたり、各作家ページに図版を掲載し、図版キャプションは各所蔵機関等より提供されたデータを参照し、「図版番号」「作品名」「制作年」「所蔵先」の順に和英で記載した。
- 作家解説の末尾には、執筆者名をイニシャルで伏した。執筆者は以下のとおりである。
SM：佐藤真実子
KY：小山 紫
- 作品リスト (pp. 50-53) では、「図版番号」「作家名」「作品名」「制作年」「技法・材質」「サイズ (cm)」「所蔵先」の順に和英で記載した。サイズは縦×横×奥行の順に記した。
- 主要参考文献リストは、「展覧会カタログ」「その他図書」に分類し、項目ごとに出版年が早い順に並べた。
- 写真クレジットは、巻末にまとめて掲載し、項目ごとに主にページ順に記した。

Explanatory Notes:

- This catalogue contains artworks displayed in *Art Brut Then & Now 2021, LETTERS Tangling Unraveling* at the Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.
- Plates are printed on each artist's page with captions that reference data provided by the collector. Captions are given in Japanese and English in order of Catalogue Number, Title, Date, and Collection.
- Catalogue entries are followed by the author's initials, as follows:
SM: SATO Mamiko
KY: KOYAMA Yukari
- List of works data (pp. 50-53) is given in order of Catalogue Number, Artist Name, Title, Date, Media, Size (cm), and Collection. Size is indicated by height x width x depth.
- The bibliography list contains principle references, categorized as Exhibition Catalogue and Other Books and listed by item in order of year of publication.
- Photo credits appear at the back of the catalogue, where they are listed for each item principally in page order.

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。(順不同／敬称略)

~~~~~

喜舎場盛也  
佐久田祐一  
ハラルト・シュトファース  
新城千奈  
富塚純光  
西川 匠  
西山友浩  
松本国三

喜舎場正一  
佐久田和代  
村吉由紀  
西川真知子

白石フユ  
林田由起子  
広瀬脩二  
藤田康城

朝妻 彰  
石崎史子  
いまぜき まり  
大江昌子  
大谷芳久  
神田浩平  
小出由紀子  
津口在五  
Peter HEIDENWAG  
三栖香織  
三宅良子

麻見和史  
大原大次郎  
西塚涼子

アートキャンプ2001実行委員会  
アトリエ・バンパキ  
アトリエひこ  
Galerie der Villa  
かんらん舎  
小出由紀子事務所  
社会福祉法人 一羊会 あとりえずかけ・すずかけ絵画クラブ  
社会福祉法人 創樹会  
日本財団  
ヒロセコレクション

## アール・ブリュットの文字

### ——「レターズ ゆいほどける文字たち」の場合

佐藤真実子（東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員）

このたび立ち上げた展覧会シリーズ「アール・ブリュット ゼン&ナウ」は、国内外のアール・ブリュットの動向において、長く活躍を続ける作家と、近年発表の場を広げつつある作家を紹介するものである。「アール・ブリュット」という言葉で語られてきた作家と作品を俯瞰的に振り返りながら、同時にその現在地を捉えることを主眼としている。

第1回目において取り上げるのは、「文字」を扱う作家である。「レターズ ゆいほどける文字たち」と題した本展では、文字に魅了され文字にとりつかれた8名の作家の作品を展観する。

アール・ブリュットと文字の関わりは深い。国内外のアール・ブリュットの作家を見渡せば、そこかしこに文字を見つけられる。たとえばそれは、ともに膨大なページ数の物語をつむいだアドルフ・ヴェルフリ（1864-1930）とヘンリー・ダーガー（1892-1973）にも当てはまるだろう。ヴェルフリの壮大な旅行記『揺りかごから墓場まで』（1908-12）における少年ドゥフィの冒険の場面には、ヴェルフリ自身が書いたテキストが組み込まれ、ダーガーの『非現実の王国で』と呼ばれる物語では、ヴィヴィアン・ガールズの戦いの場面の挿画にダーガーが記した短い説明が見られる。

もちろん、物語に由来しない作品にも、さまざまな形で文字が現れる。紙に書かれる文字、木でできた立体に彫られる文字、布に縫い込まれる文字、建物の壁に刻まれる文字。また、同じ紙に書かれた文字であっても、紙片に書かれることもあれば、ノートやスクラップ・ブック、書物のように綴じてまとめられることもある。この多様さゆえ、国内外を問わず、アール・ブリュットの文字を用いた表現には大きな関心が寄せられ、文字や書く行為をテーマとした展覧会も数多く開催されてきた<sup>1</sup>。特に近年、大規模な海外展や書籍の出版が見られ、アール・ブリュットにおける「文字」の表現の詳しい考察が試みられている<sup>2</sup>。

このような背景を踏まえた上で、本展では、文字を扱う国内外のアール・ブリュットの中でも、まずは基本的な形態である紙を用いた平面作品をつくる

作家に焦点を当てる。展示室では、特に前半部に敢えて細い回廊のような空間をつくり、複雑に組み合わせられた文字の動きを、できるだけ近づいて見られるような構成とした。では、展示の順に、8名の作家の文字にじっくりと迫っていこう。

文字が登場する作品の中でも多く見られるのは、自身が気に入った文字や言葉を書き出す作品である。松本国三はその代表と言えるだろう。松本は、自身が熱中する分野の資料から選んだ文字や、身体の中を巡るあらゆる思いを、身近にある紙に一心に書きつける。長い間に変化した文字は堆積して線の塊と化し、文字から構成されていることがほとんどわからないものもある。

特定の文字の種類を好んで書く作家もいる。新城千奈は、主にひらがなを書く。新城は、文字を肉づけし、まるや楕円、三日月などの形に分解する。文字のない地の処理にも余念がなく、細いペンのみで執拗に塗りつぶしたり、文字の断片のような形や線を加えて空白を埋めたりする。地の塗り込みや装飾的な線描の効果により、文字は画面に埋め込まれていく。

西山友浩は文字どうしを自らつなぎ合わせて、紙に日々の出来事を綴る。線をつなげたり交わせたりすることに強くひかれる西山は、書き進めながら文字の線の長さや傾きを観察し、時々後戻りをしながら、即興的に線を伸ばして重ね合わせていく。この作業により、のびやかな書体の西山の文字は、一見、文字とわからない文様のような線の層となる。

一方、西川匠の文字は、どの文字も明瞭に記されている。西川は、自分の好きなものを描き着色した後、その傍に必ず文字を書く。名称や色、所在地などの言葉を、自身の名前や制作日時とともに、丁寧に並べ記していく。ボリュームのある色面と対照的なさまざまな長さの線の集合は、画面に細かなリズムを与え、それ自体が重要なモチーフとなっている。

喜舎場盛也が好んだ文字の種類は、漢字である。ある時は、やや丸みを帯びた書体で、文字間をあけずに積み上げるように記す。またある時は、図鑑のページに記されたひらがなやカタカナを、当て字も用いながら漢字に変換する。喜舎場は自身の秩序に則り、文字どうしをあくまで整然と書き並べる。それゆえ、西川と同様に、ごく小さな文字でも明瞭さを保ち、存在感を放つ。

これに対して、富塚純光は物語を創作し、そのテキストと挿画を一つの画面に収める。絵を描いた後に加えられるテキストは勢いよく書き上げられるため、文字は登場人物や山などの輪郭線を突き破って、その体内や地中まで入り込むこともある。筆の太さや鮮やかで細かな色面の効果によって、文字は画面に溶け合い、しばしば読み解くのが困難となる。

佐久田祐一は、好きなものの名前などの文字の形を切り取り貼り重ねる。

文字は、一見、互いに何の関係もないようにみえるが、それらは、佐久田が家族と過ごした情景と深く結びついたものである。切り取られた色とりどりの文字はその形を保ったまま、佐久田の記憶の層を映し出すように、レイヤーをなして大量の糊とともに画面にとどめられている。

ハラルト・シュトファースは、母親に宛てた手紙に文字を綴る。シュトファースは、丁寧に罫線を引いた後、そこに丸みを帯びた文字をのせ、小さな変化をつけたシンプルな定型文を繰り返す。何枚も書き綴ることで、手紙はメッセージを伝える手段ではもはやなくなり、書く快樂にひたるための個人的で親密な空間となっている。

再び登場する松本国三の手紙では、文字がメッセージカードの中には収まりきらず、封筒の両面、宛名ラベルの上にもまで及ぶ。託す思いが募れば募るほど、スタンプやシールが増えていく。書き乱れ重なり合った文字からは、誰かに伝わるように書く行為で、松本が抑えきれない願いを自ら消化しているようにさえみえる。

このように、本展は、文字の連なり (letters) から手紙 (letters) へと展開するような構成となっている。

8名の作品はアール・ブリュットの文字の特徴を網羅的に示すものではないが、本展から見出される点をいくつか挙げたい。

すべてに共通するのは、文字を連ねることへの強い関心である。それは、文字を書く、あるいは、文字を表すという身体行為への興味と深く結びついている。つまり、ペンや筆を握り紙を引っ掻き擦りながら綴る行為、ハサミを走らせて紙を切り取り貼り重ねる行為、それらの文字を表す行為への愛着やこだわりも、画面を形づくっている。作家にとって、文字と身体行為は切り離せないものとなる。それは、楽しみや心地よさを感じるための術である場合もあれば、自身の中に収めきれない切実な思いを託すための術となる場合もある。もちろん、文字からも制作からも離れる場合さえある。しかし、たとえ短い期間であったとしても、文字を書き表す時間は、好きな文字を自らの好むような形と方法で操り、自分だけの文字の世界をつくり出すことができる大切な時間であり、画面は守られた場所となる。展示した作品の画面はどれも、作家にとって一つの「安全地帯」となっているようだ。

さらに、アール・ブリュットの文字は、私たちの「読む」行為に再考を迫る。文字をテーマとした展覧会を見ると、おそらく多くの人は、画面の中に文字や言葉らしきものを探して意味を読み取ろうとしてしまう。しかし、実際に8名の作品を見ると、元の文字の形を保ったものもあれば、書く速さや作家の手の癖、独自に生み出される書体などによって、そもそも文字だと判別

がつかないものもある。そうした文字や文字のようなものを見ているうちに、それらがまるで読まれることを避けるかのように、ただの線や点へと分かれていくことに気づくだろう。アール・ブリュットの文字は、画面に書かれる中で、音や意味を伴う単なるコミュニケーション手段であることから離れて、文字の形態や、文字を構成する線の動き、点の配置などへと見る者の注意を誘うようになる。つまり、文字そのものの形や身体性に目を向けることを求めるのである。たとえ元の文字の形を維持していたとしても、事態は同じである。ここでは、文字の音や意味はいとも簡単に解体する。そうして、私たちは、文字を見て、音と意味とを読み取ろうとする自動化された態度を揺さぶられることになるのである。

多くの美術作品に共通することだが、「わからないもの」は見る者を身構えさせ、時には遠ざける。アール・ブリュットでは、つくり手がそもそも「作品」としてつくっていない場合が多く、また、しばしば自ら制作の意図を示すことが難しい場合もあり、「わからないもの」に満ちている。しかし、本展では、容易に音や意味を読み取れないからこそ、文字の形や線の動き、すなわち文字の身体のほうが前景化し、見る者はそこにおもしろさやおどろきを発見するようになる。さらには、文字とドローイング、書かれるものと描かれるものとの境界が曖昧になり、いつも見慣れている文字が別のものに見えていく。この文字でありながら、文字であることを忘れさせてしまうゆらぎの中に、アール・ブリュットの文字のおもしろさがあるのだ。

8名の作家が書く文字をたよりに、それぞれが築く安全地帯へと近づきながら、書かれ、描かれた文字と、そこから生まれる線や点の間を巡って、アール・ブリュットのゆいほどける文字たちの世界を探検してほしい。

#### 註

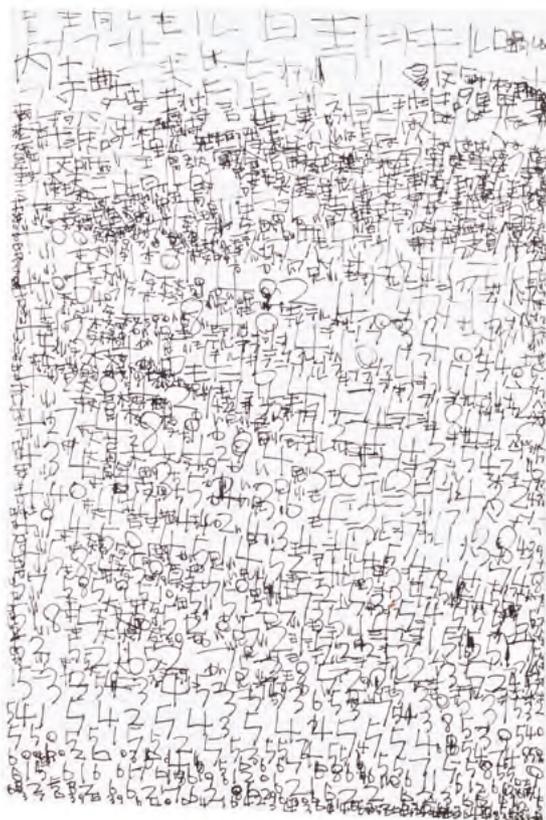
1. 海外展は、主に以下が挙げられる。Écrits bruts, Collection de l'Art Brut (Lausanne, 1979); Wunderhülsen & Willenskurven. Bücher, Hefte und Kalendarien, Sammlung Prinzhorn (Heidelberg, 2002), Galerie im Stadtmuseum Jena (Jena, 2002); Écriture en délire, Collection de l'Art Brut (Lausanne, 2004), Halle Saint Pierre (Paris, 2005), Musée International d'Art Naïf Anatole Jakovsky (Nice, 2005); Do the Write Thing: Read Between the Lines, christian berst art brut (New York, 2014; Paris, 2018). また、国内では、「文字・もじ・書」(もうひとつの美術館、栃木、2003年)の他、現代美術の作品を交えた近年の「文体の練習」(鞆の津ミュージアム、広島、2018年)、「文字模似言葉(もじもじことのは)」(ボーダレス・アートミュージアム NO-MA、滋賀、2021年)などが挙げられる。

2. 2020年には、ジュネーヴ現代美術センターにおいて、同館とアール・ブリュット・コレクションとの大規模な共同企画展「Scrivere Disegnando. Quand la langue cherche son autre」が開催され、また、同年、ルシアン・ペリーによって、以下の書籍が出版され、考察が進められた。Lucienne Peiry, *Écrits d'art brut: Graphomanes extravagants*, Paris: Éditions du Seuil, 2020.



## 松本国三

MATSUMOTO Kunizo

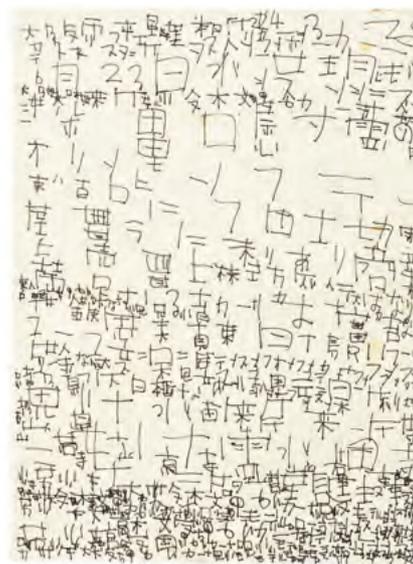


001 無題 2006年 / 作家蔵  
Untitled 2006 / Collection of the artist

1962年、大阪府生まれ。通天閣の近くにあった家業の中華料理店を手伝う傍ら、文字や数字の書き写しがきっかけとなり、1985年頃より文字を書くことが日課となる。1995年より大阪市の「アトリエひこ」に参加してからは、文字を介したやりとりを楽しむかのように、家族とともに熱心に観てきた歌舞伎をはじめ、茶道や少年アイドルなど好きなものにつわる文字を関連する資料から選び出し、身近な紙に記す。

手紙も松本のライフワークの一つである。書くことで物事が動くと思える松本は、封筒の両面、宛名ラベルまでびっしりと文字で埋める。文字を覚えて書きこなすうちに、画面に現れる文字には癖や微かな乱れが生じ、今では草書のような文字へと移行している。かろうじて文字が見え隠れする細かな点と線の層は、あらゆる思いを文字に託して生き抜く松本の姿を映し出す。

近年の展示に「Scrivere Disegnando. Quand la langue cherche son autre」(ジュネーヴ現代美術センター、2020年)などがある。作品は、ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションなどに収蔵。[SM]



002 無題 2005年 / 作家蔵  
Untitled 2005 / Collection of the artist

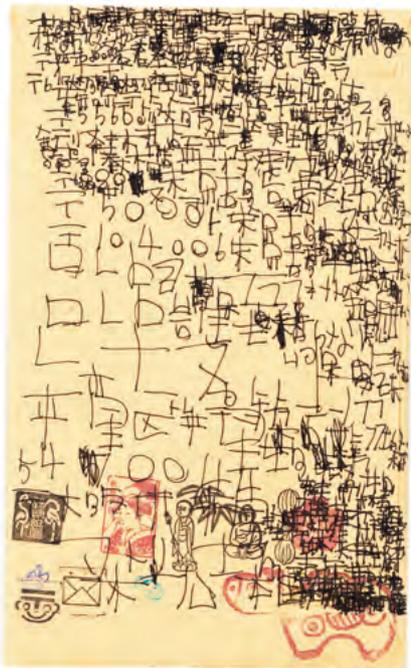
003 無題 2004年 / 作家蔵  
Untitled 2004 / Collection of the artist



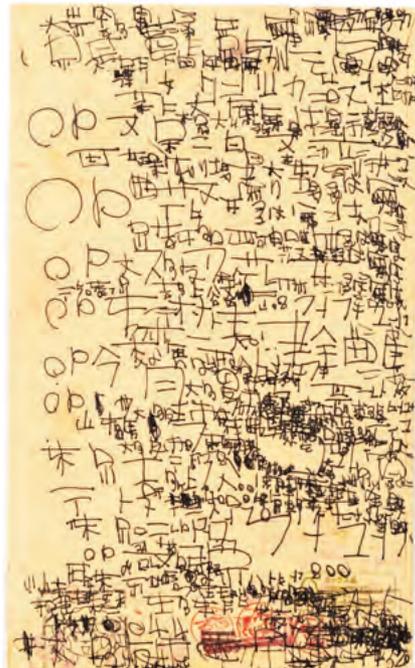
004 無題 2016年 / 作家蔵  
 Untitled 2016 / Collection of the artist



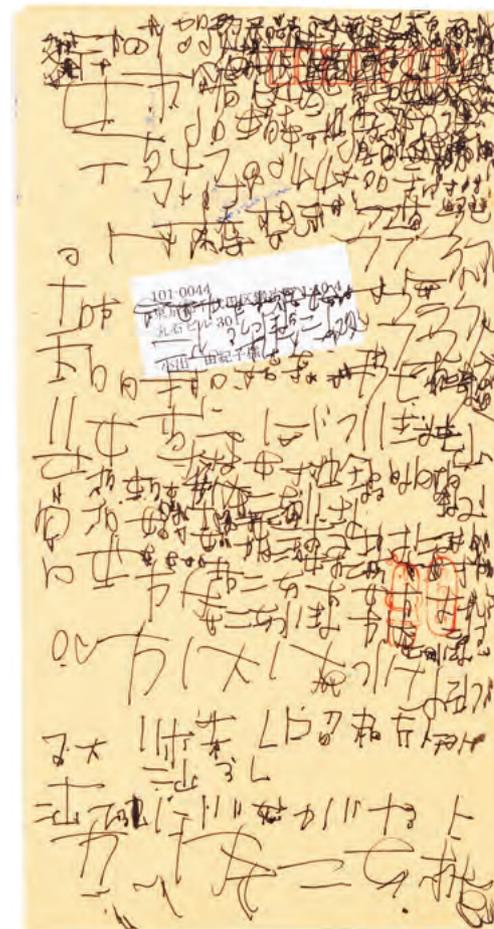
005 無題 2016年 / 作家蔵  
 Untitled 2016 / Collection of the artist



006 無題 2009年 / 個人蔵  
Untitled 2009 / Private collection



007 無題 2010年 / 個人蔵  
Untitled 2010 / Private collection



008 無題 2019年 / 個人蔵  
Untitled 2019 / Private collection

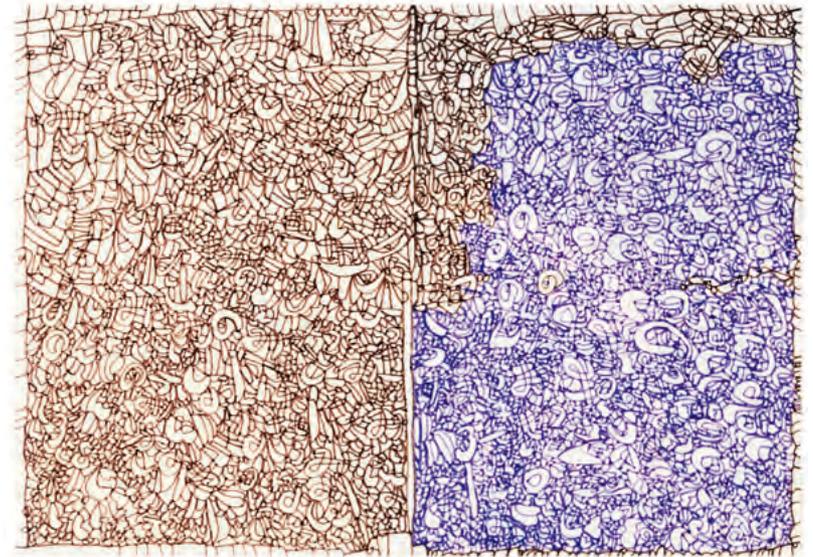
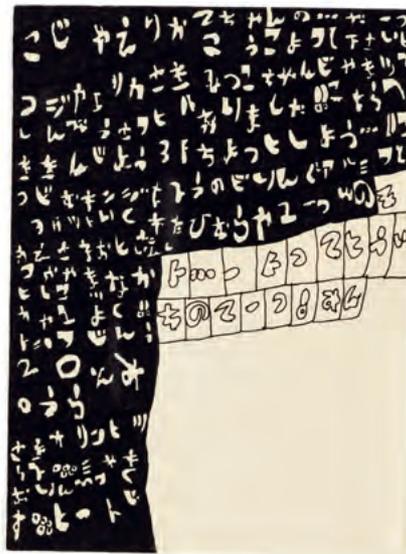
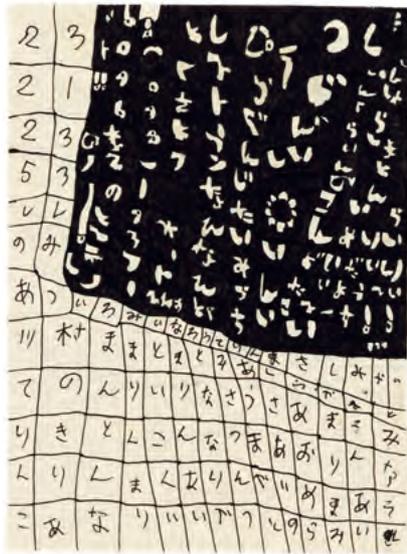
## 新城千奈

SHINJO Senna

1990年、沖縄県生まれ。幼い頃に数字に強い執着を示し、次第に、興味は文字へと移り、街中の看板などの文字を指さすことが、新城のコミュニケーション手段の一つとなっていったという。特に、円で囲まれた文字を好んで、文字の周りを装飾的に覆うことに意識を向けるようになり、それが新城の文字の特徴となる。

画面をよく見ると、文字の軸となる線一つずつ丁寧に肉づけしている様子がうかがえる。その結果、肥大化した線が長細い円や三日月のような形となり、それらが複雑に入り組んだ網目のような描写となる。そこからかろうじて読み取れるのは、「の」や「み」のみである。採用される文字の多くは、家族など新城に近い人の名前に由来するようである。最初は文字以外のモチーフを交えた多色の画面であったが、近年は、色を抑えた文字のみの作品へと変化している。

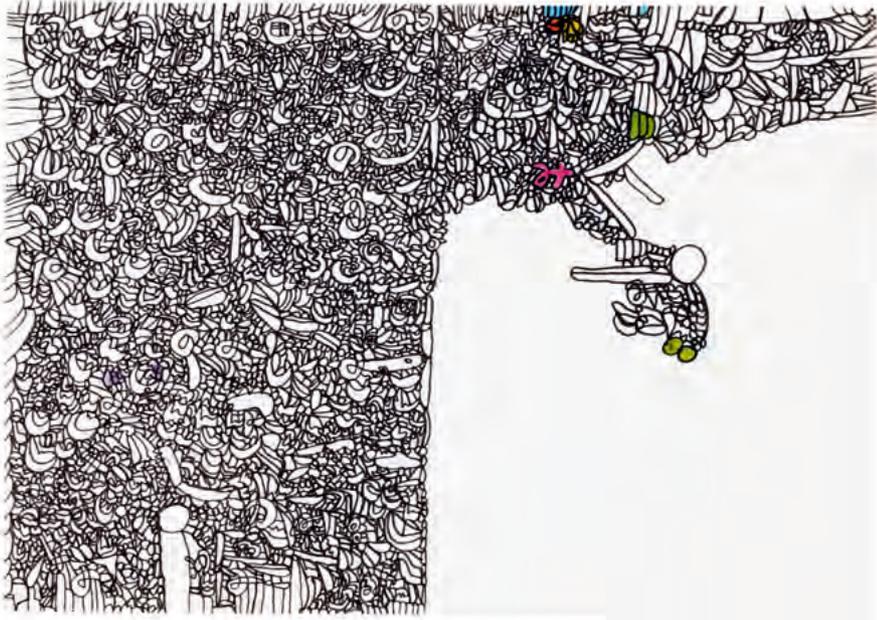
「アートキャンプ2017 素朴の大砲」展（沖縄県立博物館・美術館県民ギャラリー、2017年）以降、県内での展示を重ねてきた。[SM]



009 無題 2015年頃 / 作家蔵  
Untitled ca. 2015 / Collection of the artist

010 無題 2015年頃 / 作家蔵  
Untitled ca. 2015 / Collection of the artist

011 無題 2015年頃 / 作家蔵  
Untitled ca. 2015 / Collection of the artist



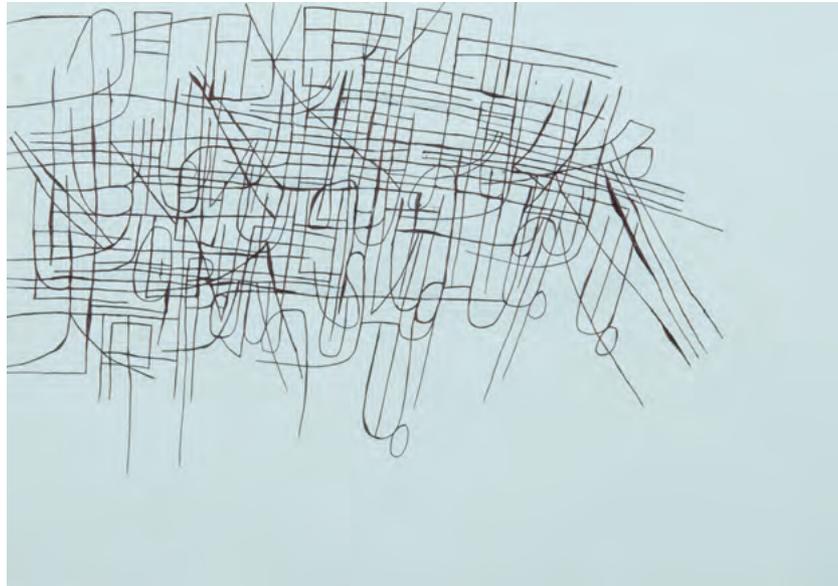
012 無題 2015年頃 / 作家蔵  
*Untitled* ca. 2015 / Collection of the artist



013 無題 2020年 / 作家蔵  
*Untitled* 2020 / Collection of the artist

## 西山友浩

NISHIYAMA Tomohiro

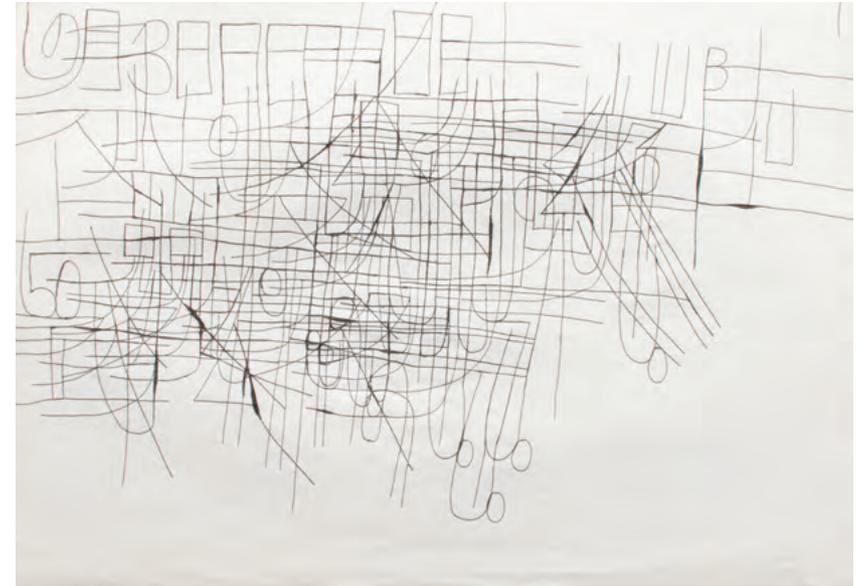


014 無題 2009年 / 社会福祉法人 創樹会  
Untitled 2009 / Social welfare corporation Soujukai

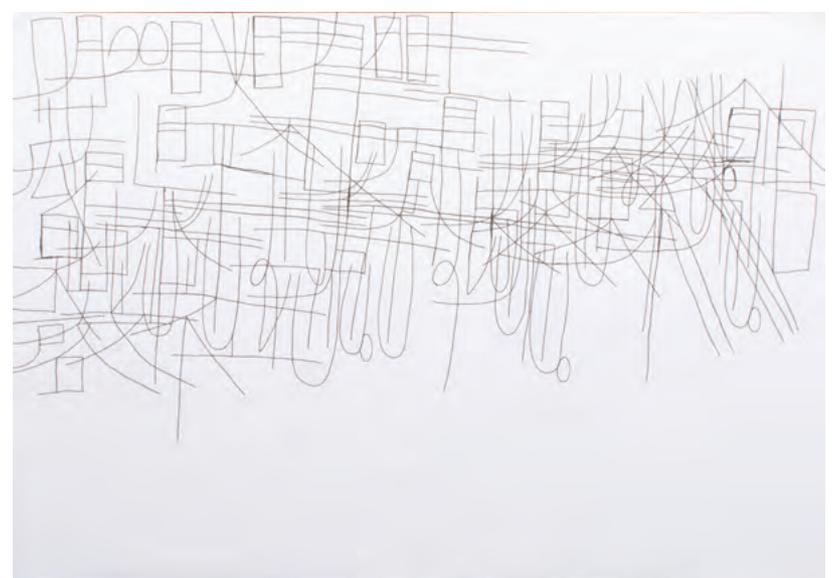
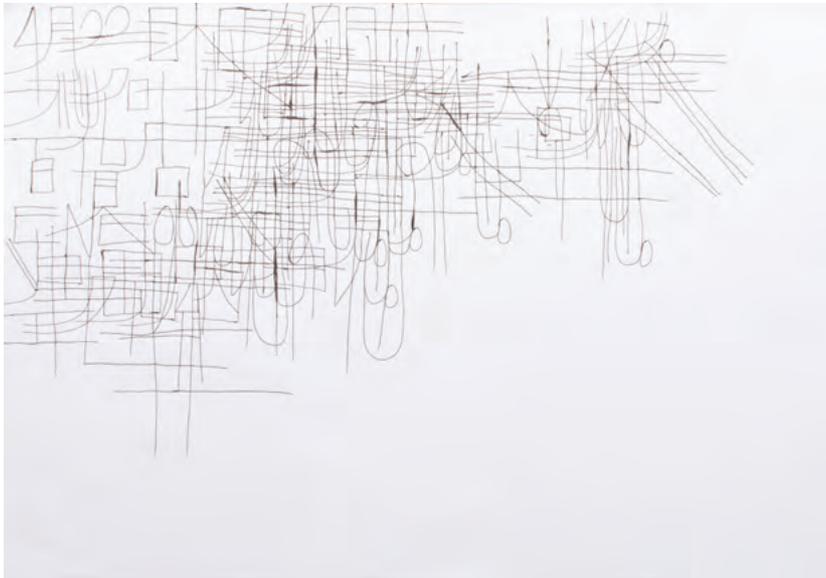
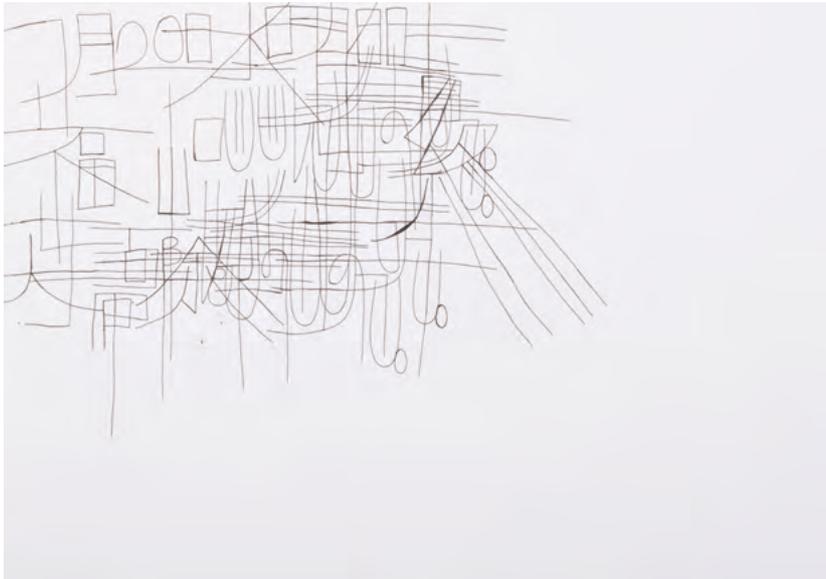
1974年、広島県生まれ。福山市の「あゆみ苑成人寮」で暮らす。縦横、斜めに引いた線の端を重ね合わせるにより、文様のような文字を書く。自ら編み出したこの手法により、洗車や掃除をしたことなど日々の出来事を日記に綴っていた。

現在は書かれていない西山の日記は、日付から始まり「終。」の表記で終わること、同じ文字は似た字形で書かれることなどの決まりごとを知ると、いくらか解読が可能になる。西山は書き進めていくなかで、記した文字からつなげられそうな線や形を探し、重ねて結ぶことを繰り返す。強い筆圧でためらうことなく線を描くため、用紙の濃いインクだまりには裂けている部分もみられる。漢字の角ばった部分とひらがなの丸みを帯びた部分の特徴をとらえながら端と端を結ぶその文字たちは、意味を理解するためほどかれた後もなお、用紙左上に偏った力強い文様として、観るものの脳裏に焼き付く。

主な出展歴に「ポコラート宣言 2014」(アーツ千代田3331、東京、2014年)、「文体の練習」(鞆の津ミュージアム、広島、2018年)など。[KY]



015 無題 2009年 / 社会福祉法人 創樹会  
Untitled 2009 / Social welfare corporation Soujukai



016 無題 2010年 / 社会福祉法人 創樹会  
*Untitled* 2010 / Social welfare corporation Soujukai

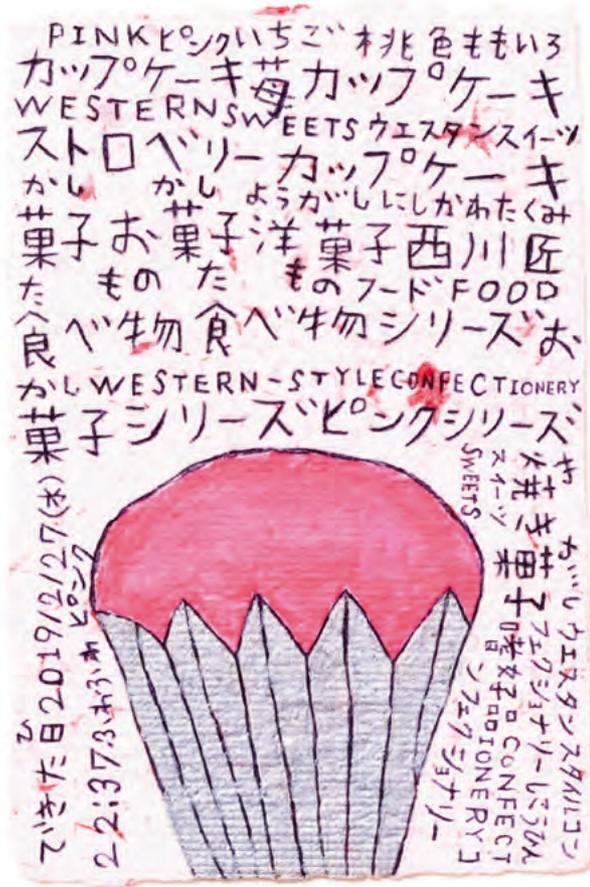
017 無題 2010年 / 社会福祉法人 創樹会  
*Untitled* 2010 / Social welfare corporation Soujukai

018 無題 2009年 / 社会福祉法人 創樹会  
*Untitled* 2009 / Social welfare corporation Soujukai

019 無題 2010年 / 社会福祉法人 創樹会  
*Untitled* 2010 / Social welfare corporation Soujukai

# 西川 匠

NISHIKAWA Takumi



020 「食べ物シリーズ PINKのお菓子」カップケーキ苺 2019年 / 作家蔵  
Food Series, PINK Sweets: Strawberry Cupcake 2019 / Collection of the artist

1986年、神奈川県生まれ。現在は横浜市で活動する「アトリエ・パンパキ」に、2000年頃から参加。水をはじく素材に絵具の色をのせることへの探求がきっかけとなり、石けん水と水彩絵具を独自の配合で混ぜ合わせる手法を見出す。ゲームに登場する城や世界遺産、スイーツなどの食べ物を、西川の視点で捉え画面に収める。石けんの適度な油分により、水彩でありながらしっとりとした質感と鮮やかな発色が生まれている。紙の手触りにもこだわる西川は、近年は、自ら紙をつくることもある。

モチーフの色づけが終わり、写真に収めた後に、文字が必ず書き添えられる。旅行ガイドやレシピサイトなどから写し取ったものに、丁寧にふりがなが振られる。西川のリズムで時には同じ言葉が繰り返されながら、漢字やひらがな、アルファベット、数字がバランスよく配された文字の連続は、しばしば裏面にまで及ぶ。

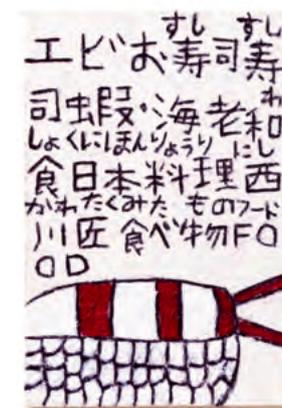
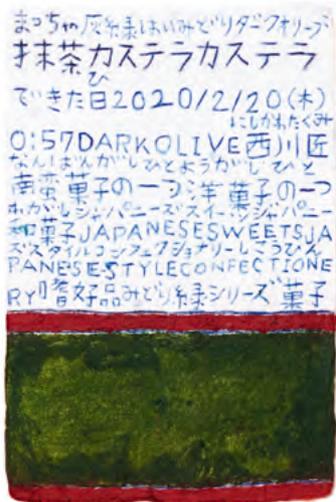
主な展示に、「Fellow Art Gallery vol.11 西川匠展「ようこそ！石けんアートの世界へ」」（アートフォーラムあざみ野、神奈川、2013年）、「ポコラート全国公募展 vol. 9」（アーツ千代田3331、東京、2020年）などがある。[SM]



021 「食べ物シリーズ PINKのお菓子」オレオのいちごピンクレアチーズケーキ 2019年 / 作家蔵  
Food Series, PINK Sweets: No-Bake Strawberry Pink Cheesecake with Oreo Crust 2019 / Collection of the artist



022 「食べ物シリーズ PINKのお菓子」桜最中 2019年 / 作家蔵  
Food Series, PINK Sweets: Sakura Monaka 2019 / Collection of the artist



023 「食べ物シリーズ 抹茶のお菓子」抹茶クッキー 2020年 / 作家蔵  
Food Series, Matcha Sweets: Matcha Cookie 2020 / Collection of the artist

024 「食べ物シリーズ 抹茶のお菓子」抹茶カステラ 2020年 / 作家蔵  
Food Series, Matcha Sweets: Matcha Castella 2020 / Collection of the artist

025 「食べ物シリーズ 抹茶のお菓子」抹茶生八つ橋 2020年 / 作家蔵  
Food Series, Matcha Sweets: Matcha Unbaked Yatsushashi 2020 / Collection of the artist

026 「寿司シリーズ」テッカマキ寿司 2019年 / 作家蔵  
Sushi Series: Tuna Roll 2019 / Collection of the artist

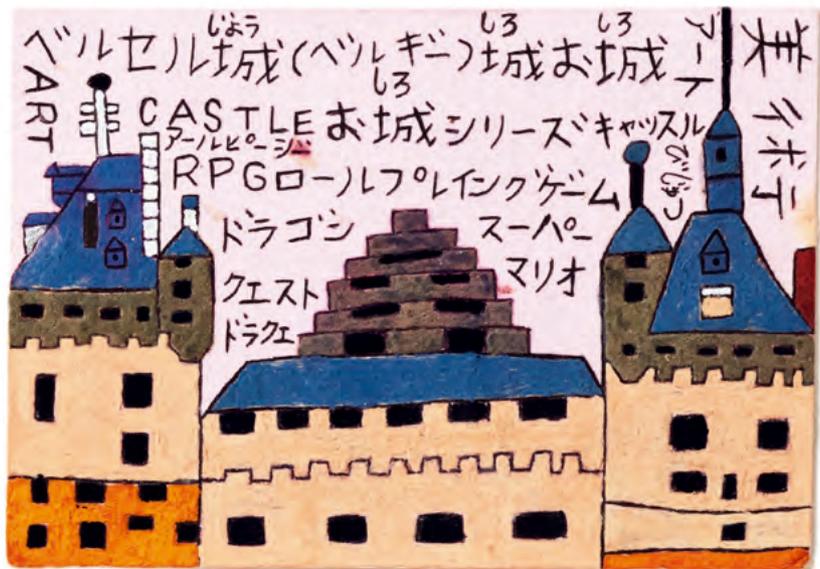
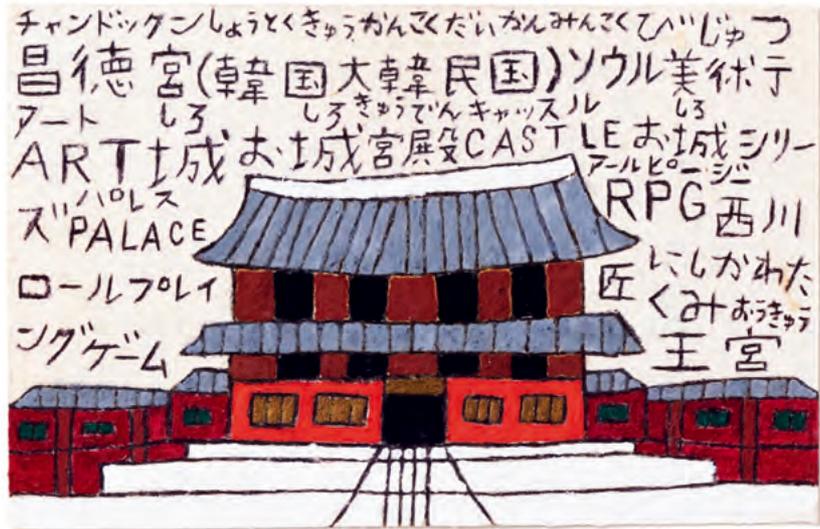
027 「寿司シリーズ」ホタテ寿司 2019年 / 作家蔵  
Sushi Series: Scallop 2019 / Collection of the artist

028 「寿司シリーズ」マグロお寿司 2019年 / 作家蔵  
Sushi Series: Tuna Nigiri 2019 / Collection of the artist

029 「寿司シリーズ」タマゴ寿司 2019年 / 作家蔵  
Sushi Series: Tamago 2019 / Collection of the artist

030 「寿司シリーズ」ウニ寿司 2019年 / 作家蔵  
Sushi Series: Sea Urchin 2019 / Collection of the artist

031 「寿司シリーズ」エビお寿司 2019年 / 作家蔵  
Sushi Series: Cooked Shrimp 2019 / Collection of the artist



032 「お城シリーズ」昌徳宮 2018年 / 作家蔵  
Castle Series: Changdeokgung Palace 2018 / Collection of the artist

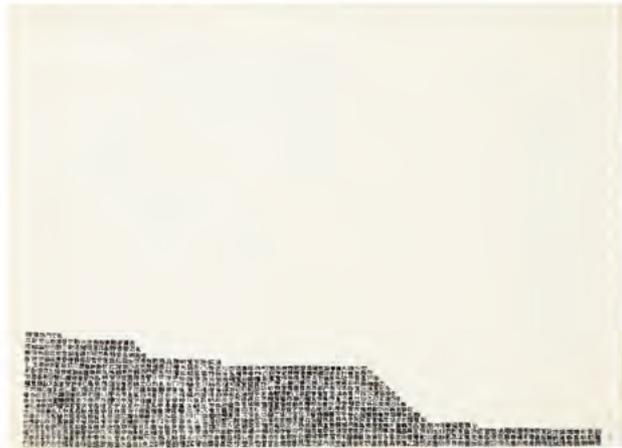
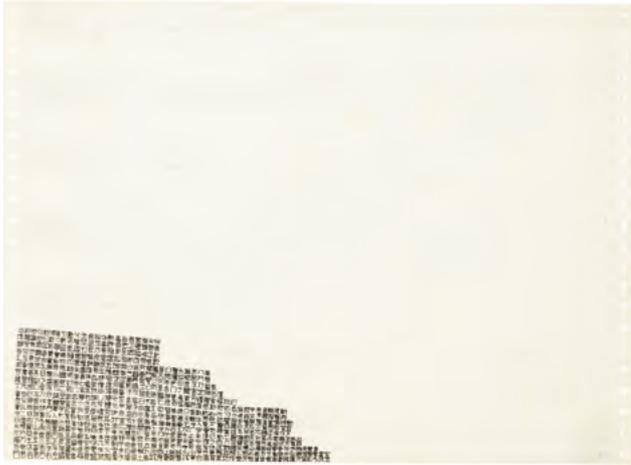
033 「お城シリーズ」ベルセル城 2018年 / 作家蔵  
Castle Series: Beersel Castle 2018 / Collection of the artist

034 「お城シリーズ」フェアモント・シャトー・フロントナック 2017年 / 作家蔵  
Castle Series: Fairmont Le Château Frontenac 2017 / Collection of the artist



## 喜舎場盛也

KISHABA Moriya



035 無題（漢字シリーズ） 2000年以前 / 作家蔵  
*Untitled (Kanji Series) Before 2000 / Collection of the artist*

036 無題（漢字シリーズ） 2000年以前 / 作家蔵  
*Untitled (Kanji Series) Before 2000 / Collection of the artist*

1979年、沖縄県生まれ。1990年代から自宅で制作、その後2002年頃から浦添市にある「わかたけアート」でも制作を行う。新聞や辞書を好んで眺めては覚えた漢字を、父親が使用していた連続用紙上にグリッド状に並べていく。書き損じやふとしたところで止めているものが多く、余白の形や文字の密度による濃淡で紙面は特徴づけられる。丸みを帯びた文字を丁寧に配置する行為の緻密さや費やされた時間が《無題（漢字シリーズ）》からは読み取れるいっぽうで、既成の図鑑の余白を文字で埋めた《図鑑》においてはその表情は異なり、文字は仮名を漢字やローマ字に変換するための手段であるかのように用いられている。

近年は文字を用いず、油性ペンのインクを滲ませてドットを描いたり、色鉛筆で四角形を並べて描くなど、制作の幅を広げている。出展歴として、「ジャポン」（アール・ブリュット・コレクション、ローザンヌ、2008-09年）のほか、国内外で多数。『日本美術全集 第20巻』（小学館、2016年）に作品が掲載された。[KY]



037 無題（漢字シリーズ） 2003年頃 / 作家蔵  
*Untitled (Kanji Series) ca. 2003 / Collection of the artist*



038 図鑑 2000年以前 / 作家蔵  
Field Guide Before 2000 / Collection of the artist



039 図鑑 2000年以前 / 作家蔵  
Field Guide Before 2000 / Collection of the artist



040 図鑑 2000年以前 / 作家蔵  
Field Guide Before 2000 / Collection of the artist

## 富塚純光

TOMIZUKA Yoshimitsu

1958年、兵庫県生まれ。1993年頃から西宮市の「すずかけ絵画クラブ」にて制作を行う。穏やかな人柄の富塚は、新聞紙や和紙の上では雄弁に、自らの記憶と創作を交えた物語や挿画を描く。単色で描いた線の間を埋めるかたちで文字を挿れ、淡く鮮やかなパステルで色彩を点描する。かかれた文字や点描はその速さゆえ流れるような形をしており、本人にも解読が困難なこともあるという。

読まれることを前提としない創作物語は国外のオール・ブリュットにも多く見られ、富塚もその代表的な作家の一人と言えるだろう。彼による物語は、11編にも及ぶ「青い山脈物語」をはじめとするその壮大さや、絵と文字が混在しさらに色彩も重なる画面の調和がその魅力である。新聞紙の黒インク上に難なく思うままに絵柄や色を載せる富塚の作風は、さながら彼の物語にも登場する寅さんの生きざまに重なるようである。

国内外にて展覧歴は「ジャポン」(オール・ブリュット・コレクション、ローザンヌ、2008-09年)のほか多数あり、同オール・ブリュット・コレクションなどに作品も収蔵されている。[KY]



041 青い山脈物語 8: おっかけられたの巻 2001年 / 日本財団  
The Tale of the Blue Mountains, No. 8: They Were Chased 2001 / The Nippon Foundation



042 青い山脈物語 11:1万円札と花を買ったの巻 2001年 / 日本財団  
The Tale of the Blue Mountains, No. 11: They Received a Ten Thousand Yen Bill and Flowers  
2001 / The Nippon Foundation





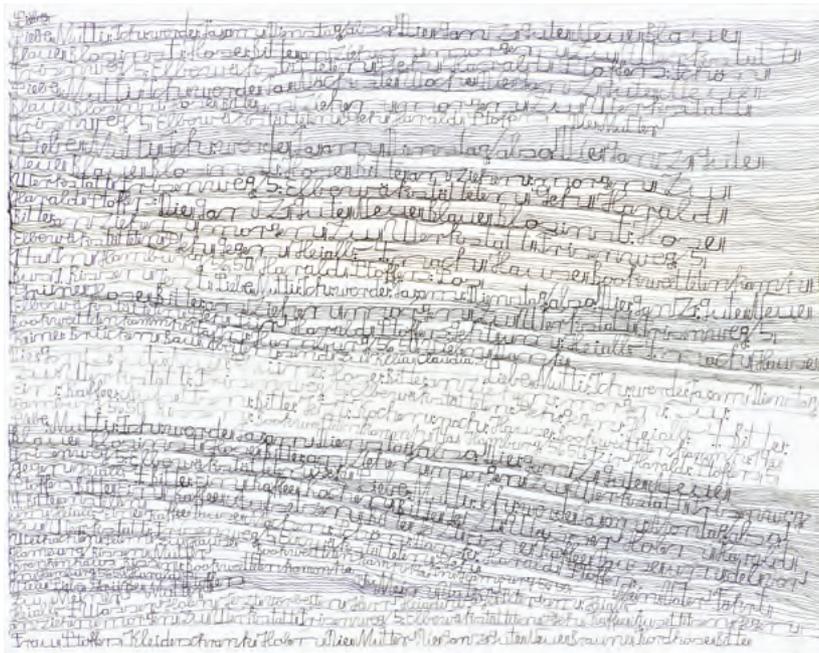
045 「なじみシリーズ」ばちな 2008年頃 / 作家蔵  
*Najimi Series: Bachina* ca. 2008 / Collection of the artist



046 「なじみシリーズ」いんのまおおはし 2008年頃 / 作家蔵  
*Najimi Series: Innomaohashi* ca. 2008 / Collection of the artist

## ハラルト・シュトファース

### Harald STOFFERS



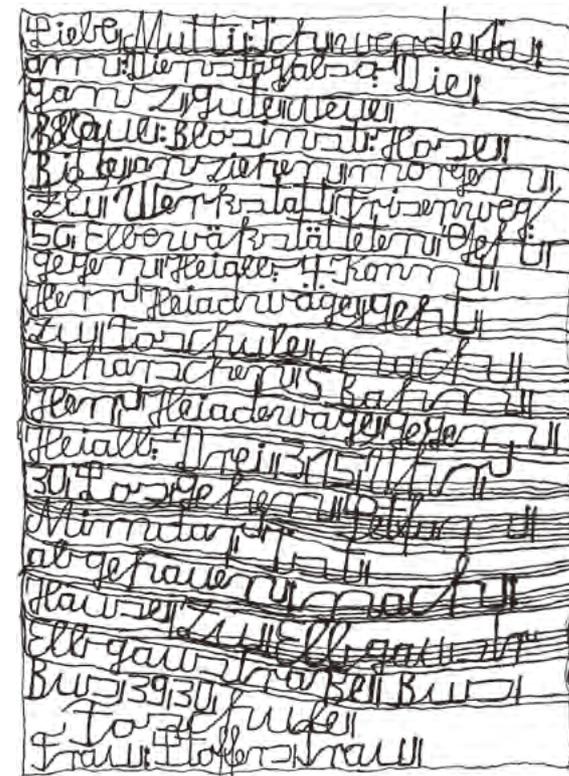
047 手紙 7 2001年 / 個人蔵  
Letter 7 2001 / Private collection

1961年、ドイツ、ハンブルク生まれ。1999年に同居する母親宛の手紙を記して以来、「Liebe Mutti (親愛なるお母さん)」で始まる手紙をほぼ毎日書き続ける。2001年より同市の職業施設に附属の「アテリエ・デル・ヴィラ」にて制作を行う。

シュトファースはまず、罫線を一本ずつ注意深く引いた後、その線の上や間に文字を埋め込んでいく。独自の規則で置かれるコロンのや、ドイツ語のウムラウトといった記号が、特徴的な文字と線の連なりにさらさらリズムを与えている。

手紙では、仕事に履いていくズボンの色や柄、その曜日などを母親に伝える決まった文が、いくつかのバリエーションで繰り返される。たしかに母親に宛てた手紙の形ではあるが、それは次第に、ただ文字を綴ること、その心地よさを味わうために、シュトファースが使い続ける一つのルーティンとなっているようにみえる。

パラグラフが終わるごとに破られるため小さな紙片だった手紙は、近年では4メートルを超える高さの大作がつけられるほど巨大化している。作品は、ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションなどに収蔵。[SM]



048 手紙 25 (表) 2003年 / 個人蔵  
Letter 25 (recto) 2003 / Private collection

Liebe Mutti: Ich werde ja am Dienstag  
 ab 9 Uhr nach Hause kommen. Ich  
 habe Blumen für dich selbst und  
 auch für morgen. Ich werde  
 alle Kosten für den Weg  
 selber bezahlen.

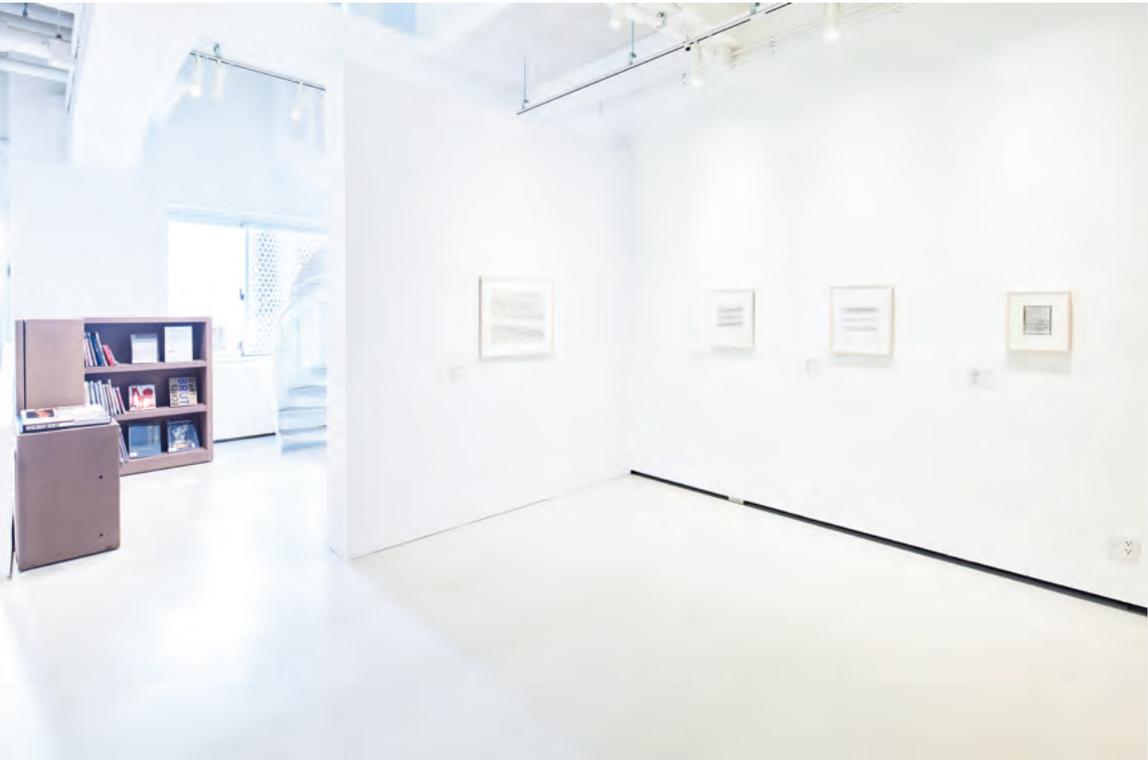
Liebe Mutti: Ich werde ja am Dienstag  
 ab 9 Uhr nach Hause kommen. Ich  
 habe Blumen für dich selbst und  
 auch für morgen. Ich werde  
 alle Kosten für den Weg  
 selber bezahlen.

Liebe Mutti: Ich werde ja am Dienstag  
 ab 9 Uhr nach Hause kommen. Ich  
 habe Blumen für dich selbst und  
 auch für morgen. Ich werde  
 alle Kosten für den Weg  
 selber bezahlen.

Liebe Mutti: Ich werde ja am Dienstag  
 ab 9 Uhr nach Hause kommen. Ich  
 habe Blumen für dich selbst und  
 auch für morgen. Ich werde  
 alle Kosten für den Weg  
 selber bezahlen.

Liebe Mutti: Ich werde ja am  
 Dienstag nach Hause kommen. Ich  
 habe Blumen für dich.





## 作品リスト

### List of Works

---

001 松本国三 無題 2006年 / インク・紙 / 19.0×12.7 / 作家蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2006 / Ink on paper / Collection of the artist

---

002 松本国三 無題 2005年 / インク・紙 / 24.8×18.0 / 作家蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2005 / Ink on paper / Collection of the artist

---

003 松本国三 無題 2004年 / 朱墨・紙 / 24.2×16.7 / 作家蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2004 / Vermilion sumi ink on paper / Collection of the artist

---

004 松本国三 無題 2016年 / インク・カレンダー / 37.0×26.3 / 作家蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2016 / Ink on calender / Collection of the artist

---

005 松本国三 無題 2016年 / インク・カレンダー / 37.0×26.3 / 作家蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2016 / Ink on calender / Collection of the artist

---

006 松本国三 無題 2009年 / インク・封筒 / 20.0×12.0 / 個人蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2009 / Ink on envelope / Private collection

---

007 松本国三 無題 2010年 / インク・封筒 / 20.0×12.0 / 個人蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2010 / Ink on envelope / Private collection

---

008 松本国三 無題 2019年 / インク・封筒 / 23.2×12.0 / 個人蔵  
MATSUMOTO Kunizo *Untitled* 2019 / Ink on envelope / Private collection

---

009 新城千奈 無題 2015年頃 / インク・紙 / 14.0×10.0 / 作家蔵  
SHINJO Senna *Untitled* ca. 2015 / Ink on paper / Collection of the artist

---

010 新城千奈 無題 2015年頃 / インク・紙 / 14.0×10.0 / 作家蔵  
SHINJO Senna *Untitled* ca. 2015 / Ink on paper / Collection of the artist

---

011 新城千奈 無題 2015年頃 / インク・紙 / 21.0×29.6 / 作家蔵  
SHINJO Senna *Untitled* ca. 2015 / Ink on paper / Collection of the artist

---

012 新城千奈 無題 2015年頃 / インク・紙 / 21.0×29.6 / 作家蔵  
SHINJO Senna *Untitled* ca. 2015 / Ink on paper / Collection of the artist

---

013 新城千奈 無題 2020年 / インク・紙 / 18.0×25.2 / 作家蔵  
SHINJO Senna *Untitled* 2020 / Ink on paper / Collection of the artist

---

014 西山友浩 無題 2009年 / インク・紙 / 20.6×29.0 / 社会福祉法人 創樹会  
NISHIYAMA Tomohiro *Untitled* 2009 / Ink on paper / Social welfare corporation Soujukai

---

015 西山友浩 無題 2009年 / インク・紙 / 21.0×29.7 / 社会福祉法人 創樹会  
NISHIYAMA Tomohiro *Untitled* 2009 / Ink on paper / Social welfare corporation Soujukai

---

016 西山友浩 無題 2010年 / インク・紙 / 27.0×37.9 / 社会福祉法人 創樹会  
NISHIYAMA Tomohiro *Untitled* 2010 / Ink on paper / Social welfare corporation Soujukai

---

017 西山友浩 無題 2010年 / インク・紙 / 25.6×36.3 / 社会福祉法人 創樹会  
NISHIYAMA Tomohiro *Untitled* 2010 / Ink on paper / Social welfare corporation Soujukai

---

018 西山友浩 無題 2009年 / インク・紙 / 25.6×36.3 / 社会福祉法人 創樹会  
NISHIYAMA Tomohiro *Untitled* 2009 / Ink on paper / Social welfare corporation Soujukai

---

019 西山友浩 無題 2010年 / インク・紙 / 25.6×36.3 / 社会福祉法人 創樹会  
NISHIYAMA Tomohiro *Untitled* 2010 / Ink on paper / Social welfare corporation Soujukai

---

020 西川 匠 「食べ物シリーズ PINKのお菓子」カップケーキ  
2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 15.0×10.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Food Series, PINK Sweets: Strawberry Cupcake*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

021 西川 匠 「食べ物シリーズ PINKのお菓子」オレオのいちごピンクレアチーズケーキ  
2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 15.0×10.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Food Series, PINK Sweets: No-Bake Strawberry Pink Cheesecake with Oreo Crust*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

022 西川 匠 「食べ物シリーズ PINKのお菓子」桜最中  
2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 15.0×10.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Food Series, PINK Sweets: Sakura Monaka*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

023 西川 匠 「食べ物シリーズ 抹茶のお菓子」抹茶クッキー  
2020年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 15.0×10.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Food Series, Matcha Sweets: Matcha Cookie*  
2020 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

024 西川 匠 「食べ物シリーズ 抹茶のお菓子」抹茶カステラ  
2020年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 15.0×10.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Food Series, Matcha Sweets: Matcha Castella*  
2020 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

025 西川 匠 「食べ物シリーズ 抹茶のお菓子」抹茶生八つ橋  
2020年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 15.0×10.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Food Series, Matcha Sweets: Matcha Unbaked Yatsushashi*  
2020 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

026 西川 匠 「寿司シリーズ」テッカマギ寿司 2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 9.0×6.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Sushi Series: Tuna Roll*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

027 西川 匠 「寿司シリーズ」ホタテ寿司 2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 9.0×6.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Sushi Series: Scallop*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

028 西川 匠 「寿司シリーズ」マグロお寿司 2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 9.0×6.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Sushi Series: Tuna Nigiri*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

029 西川 匠 「寿司シリーズ」タマゴ寿司 2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 9.0×6.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Sushi Series: Tamago*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

030 西川 匠 「寿司シリーズ」ウニ寿司 2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 9.0×6.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Sushi Series: Sea Urchin*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

031 西川 匠 「寿司シリーズ」エビお寿司 2019年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 9.0×6.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Sushi Series: Cooked Shrimp*  
2019 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

032 西川 匠 「お城シリーズ」昌徳宮 2018年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 10.0×15.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Castle Series: Changdeokgung Palace*  
2018 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

033 西川 匠 「お城シリーズ」ベルセル城 2018年 / インク、水彩絵具、石けん・手漉き紙 / 10.0×15.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Castle Series: Beersel Castle*  
2018 / Ink, watercolor and soap on handmade paper / Collection of the artist

---

034 西川 匠 「お城シリーズ」フェアモント・シャトー・フロントナック 2017年 / インク、水彩絵具、石けん・自作の紙 / 10.0×15.0 / 作家蔵  
NISHIKAWA Takumi *Castle Series: Fairmont Le Château Frontenac*  
2017 / Ink, watercolor and soap on paper made by the artist / Collection of the artist

---

035 喜舎場盛也 無題(漢字シリーズ) 2000年以前 / インク・紙 / 27.8×38.0 / 作家蔵  
KISHABA Moriya *Untitled (Kanji Series)* Before 2000 / Ink on paper / Collection of the artist

---

036 喜舎場盛也 無題(漢字シリーズ) 2000年以前 / インク・紙 / 28.0×38.2 / 作家蔵  
KISHABA Moriya *Untitled (Kanji Series)* Before 2000 / Ink on paper / Collection of the artist

---

037 喜舎場盛也 無題(漢字シリーズ) 2003年頃 / インク・紙 / 28.0×37.0 / 作家蔵  
KISHABA Moriya *Untitled (Kanji Series)* ca. 2003 / Ink on paper / Collection of the artist

---

038 喜舎場盛也 図鑑 2000年以前 / インク・図鑑 / 26.5×19.0×2.5 / 作家蔵  
KISHABA Moriya *Field Guide* Before 2000 / Ink on field guide / Collection of the artist

---

039 喜舎場盛也 図鑑 2000年以前 / インク・図鑑 / 27.5×20.0×2.5 / 作家蔵  
KISHABA Moriya *Field Guide* Before 2000 / Ink on field guide / Collection of the artist

---

040 喜舎場盛也 図鑑 2000年以前 / インク・図鑑 / 26.0×19.0×3.0 / 作家蔵  
KISHABA Moriya *Field Guide* Before 2000 / Ink on field guide / Collection of the artist

---

041 富塚純光 青い山脈物語 8: おっかけられたの巻  
2001年 / パステル、墨・新聞紙 / 55.5×81.2 / 日本財団  
TOMIZUKA Yoshimitsu *The Tale of the Blue Mountains, No. 8: They Were Chased*  
2001 / Pastel and sumi ink on newspaper / The Nippon Foundation

---

042 富塚純光 青い山脈物語 11: 1万円札と花を貰ったの巻  
2001年 / パステル、墨・新聞紙 / 54.4×81.1 / 日本財団  
TOMIZUKA Yoshimitsu *The Tale of the Blue Mountains, No. 11: They Received a Ten Thousand Yen Bill and Flowers*  
2001 / Pastel and sumi ink on newspaper / The Nippon Foundation

---

043 佐久田祐一 「なじみシリーズ」いもりくちじま生口島  
2008年頃 / 色紙、のり・紙 / 90.0×60.0 / 作家蔵  
SAKUTA Yuichi *Najimi Series: Imorikuchijima, Ikuchijima*  
ca. 2008 / Colored paper and glue on paper / Collection of the artist

---

044 佐久田祐一 「なじみシリーズ」そさ 2008年頃 / 色紙、のり・紙 / 90.0×60.0 / 作家蔵  
SAKUTA Yuichi *Najimi Series: Sosa* ca. 2008 / Colored paper and glue on paper / Collection of the artist

---

045 佐久田祐一 「なじみシリーズ」ばちな 2008年頃 / 色紙、のり・紙 / 90.0×60.0 / 作家蔵  
SAKUTA Yuichi *Najimi Series: Bachina* ca. 2008 / Colored paper and glue on paper / Collection of the artist

---

046 佐久田祐一 「なじみシリーズ」いんのまおおはし 2008年頃 / 色紙、のり・紙 / 90.0×60.0 / 作家蔵  
SAKUTA Yuichi *Najimi Series: Innomaohashi* ca. 2008 / Colored paper and glue on paper / Collection of the artist

---

047 ハラルト・シュトファース 手紙 7 2001年 / インク・紙 / 40.0×50.0 / 個人蔵  
Harald STOFFERS *Letter 7* 2001 / Ink on paper / Private collection

---

048 ハラルト・シュトファース 手紙 25 (表) 2003年 / インク・紙 / 14.1×10.1 / 個人蔵  
Harald STOFFERS *Letter 25 (recto)* 2003 / Ink on paper / Private collection

---

049 ハラルト・シュトファース 手紙 11 2001年 / インク・紙 / 15.8×21.0 / 個人蔵  
Harald STOFFERS *Letter 11* 2001 / Ink on paper / Private collection

---

050 ハラルト・シュトファース 手紙 1 2001年 / インク・紙 / 15.0×21.0 / 個人蔵  
Harald STOFFERS *Letter 1* 2001 / Ink on paper / Private collection



## Foreword

~~~~~

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery is pleased to present *Art Brut Then & Now 2021—LETTERS Tangling Unraveling*. *Art Brut Then & Now* is an exhibition series that examines, from many angles, artists long active in the Art Brut scene in Japan and abroad alongside artists newly emergent in recent years.

LETTERS Tangling Unraveling, the first exhibition of the series, focuses on eight artists who are fascinated and obsessed with letters. Their creations reflect their passionate attachment to letters, which stems from an interest in their sounds, meaning, and shapes. That attachment may be expressed in repetitive sequences of letters the artist finds attractive, or it may take form in writings, incorporated into drawings, that describe memories or personal interests. It may also inspire diary entries or grand, self-made narratives written in a unique script or letters addressed to loved ones. As the letters—strongly marked by the artist's character—are interwoven and layered on the surface, they shed their sounds and meanings to become merely lines and points. They nevertheless quickly recover their sounds and meanings and become letters again.

Letters endlessly tangling and unraveling. We invite you to explore the worlds they conjure by writing and drawing. We would like to express our gratitude to the artists for allowing us to display their invaluable works. We also thank everyone who contributed their advice and cooperation toward the realization of this exhibition.

March 2021
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery,
Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Art Brut Letters: The Case of *LETTERS Tangling Unraveling*

SATO Mamiko (Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Art Brut Then & Now—a new exhibition series that features artists long active in the Art Brut scene in Japan and abroad alongside artists newly emergent in recent years. While comprehensively surveying artists and works discussed in the context of “Art Brut,” it focuses primarily on the contemporary landscape.

In this, the first exhibition in the series, we examine artists who work with “letters.” Displayed in the exhibition, entitled *LETTERS Tangling Unraveling*, are works by eight artists who are fascinated and obsessed with letters. Art Brut’s relationship with letters is profound. Looking broadly at the Art Brut genre, letters will be seen to appear in many artists’ works. Two examples are Adolf Wölfli (1864-1930) and Henry Darger (1892-1973), both of whom produced monumental narratives filling many pages. In Wölfli’s grand travelogue, *From the Cradle to the Grave* (1908-12), text written by Wölfli himself is incorporated in scenes of the young hero Doufi’s adventures. In Darger’s *In the Realms of the Unreal*, short explanations penned by Darger supplement his illustrations of the Vivian Girls’ battle.

Needless to say, letters also appear in varied forms in artworks not associated

with narratives. They include letters written on paper, letters sculpted from wood, letters sewn into fabric, and letters carved in the walls of buildings. Even letters on paper may be written on paper scraps, in notebooks or scrap books, or on pages bound together like a book. Because of their large variety, Art Brut works employing letters attract great interest, whether in Japan or broad, and many exhibitions of letter and writing theme have been held.¹ In recent years, especially, large-scale exhibitions have been organized and books published, and detailed analysis of “letter” expression in Art Brut is being conducted.²

Against this background, the current exhibition, as the first in the series, places a particular focus on artists creating two-dimensional works on paper, among Art Brut artists who work with letters. In our gallery, we have intentionally installed the exhibition—particularly its first half—in narrow, corridor-like spaces, structured for close-up viewing of the movement of complexly tangled letters. Here, let us look closely at each of the eight artists’ letters in the order they appear. Common among artworks concerned with letters are works by artists who choose to write letters and words they

are fond of. MATSUMOTO Kunizo is perhaps representative of this approach. Matsumoto selects letters from print materials related to favorite pastimes and words representing thoughts circulating within him, and writes them single-mindedly on any paper at hand. His letters, which evolve over much time, pile up on the paper and form masses of lines so dense the viewer can hardly tell they consist of letters.

There are also artists who like writing a particular type of letter. SHINJO Senna, who mainly writes *hiragana*, fleshes out the characters and develops them into shapes such as circles, ovals, and crescent moons. Attentive to the ground around the characters, as well, she relentlessly fills in the empty areas using only a fine tip pen, adding shapes and lines suggestive of letter fragments. By filling in the ground and drawing decorative lines, she makes her letters appear as if embedded in the picture. NISHIYAMA Tomohiro connects letters complexly to write about day-to-day occurrences. Fascinated by the act of connecting and crossing lines, Nishiyama observes the length or slope of the line he is drawing and intuitively extends it across other lines, often backtracking to extend lines in prior letters. With their expansive calligraphic style, Nishiyama’s letters evoke striking patterns at first glance, amid which the letters are discerned only with difficulty. NISHIKAWA Takumi, on the other hand, inscribes each letter clearly. After drawing and coloring a motif he likes, Nishikawa invariably writes text

in the space around it. Names, colors, and locations related to his motif he carefully arrays along with his own name, date, and time of production. The lines of letters varying in length, themselves an important motif, strike a contrast with the color field’s impression of volume and impart a delicate rhythm to the picture.

KISHABA Moriya’s favorite kind of letters is *kanji*. Kishaba at times writes rounded *kanji* characters, stacking them tightly without spacing. At others, he converts *hiragana* and *katakana* on the pages of a field guide to *kanji*, often using phonetic equivalents. Kishaba writes letters in an orderly manner, following an order of his own invention. Like Nishikawa, he maintains clarity even when writing very small letters and gives them a strong presence.

Unlike the artists above, TOMIZUKA Yoshimitsu creates a narrative, combining story text with illustrations in one overall picture. After drawing an illustration, he writes vigorously, his letters passing through the outlines of his story character, mountains, and other figures, often penetrating deep in the character’s body or the ground. Due to his brush’s thickness and his bright, detailed color fields, the letters meld with the surrounding picture, making reading them difficult.

SAKUTA Yuichi cuts out the shapes of letters forming the names of things he likes and pastes them in layers. The letters may appear to bear no relationship to one another, but they are closely connected to scenes of

experiences with his family. The colorful and clearly legible cut-out letters are layered as they are—like layers of memories in Sakuta’s mind—using copious volumes of glue.

Harald STOFFERS writes letters in correspondence letters to his mother. After carefully drawing ruled lines, Stoffers writes out letters on them in rounded handwriting, repeating simple, fixed phrases with slight changes. By writing letters every day for years, he cancels the letter’s purpose of conveying a message and creates an intimately personal space for the pleasure of writing.

Matsumoto Kunizo reappears here with a correspondence letter whose letters overflow the message card to fill both sides of the envelope and even the address label. The stronger his fond thoughts, the more the stamps and stickers and the more the chaotic, overlapping letters. Matsumoto, it would appear, digests his irrepressible wishes through the act of writing to convey his feelings to someone.

The exhibition, thus, is structured to flow from successive “letters” to “correspondence letters.”

Although the eight artists’ works do not comprehensively show the features of Art Brut letters, I would like to examine a number of points we can draw from this exhibition.

Common to all eight artists is their passion for letters. This is sourced in their fascination with the physical act of writing or representing letters. What produces the picture, in their case,

is the act of grasping a pen or brush and writing by scratching or rubbing the implement on paper, the act of using scissors to cut and paste, and the emotional attachment to performing these acts of representing letters. For the artist, letters are inseparable from the physical act of making them. In some cases, this is because the act itself brings the artist pleasure or comfort. In others, it is because the act becomes a means of investing an earnest feeling the artist cannot completely contain within him. Naturally, there are also cases of an artist taking leave from letters and art production entirely. Yet, even if short, the time spent writing and representing letters is exceedingly precious for these artists, a time when they can manipulate and shape their favorite letters in the way they like, and create a world of letters of their own in a picture that becomes a sanctuary. The works displayed, this time, are in every case a kind of “safe zone” for the artist. Letters in works of Art Brut also make us reassess our act of “reading.” Many viewers, at an exhibition of “letters” theme, will doubtless try to decipher letters or words and read meaning. Yet, when we actually look at the eight artists’ works, some maintain the letter’s original form, but most are not recognizable as letters because of the speed or an idiosyncrasy of the artist’s hand, or the artist’s self-invented handwriting style. As we study the letters and letter-like shapes, they break down into mere lines and dots as if to prevent our reading them. Art

Brut letters, in the process of being written, abandon their function as a means of communication based on sounds and meaning, and draw the viewer’s attention instead to their shapes, the movement of their lines, and the placement of their dots. They ask us to turn our eye to the shape, or the body, of the letter itself. It is the same with letters that retain their original form. In these conditions, the sounds and meaning of the letters readily disassembles. And, on seeing the letters, our automatic attitude of reading sounds and meaning is confounded. Works of art commonly pose “things hard to understand” that we, as viewers, must mentally prepare ourselves for and which sometimes discourage us. Art Brut is full of “things hard to understand,” because the creator usually does not intend to create an “artwork” and often cannot clearly explain his or her

own aims. In this exhibition, however, precisely because we cannot easily read the sounds and meaning of the letters, their shapes and the movement of their lines seize our attention and jolt us into wonder. With this, the boundary between letters and pictures—between writing and drawing—becomes blurred, and familiar letters we see every day appear strange and different. Here, in our wavering between recognizing them as letters and forgetting they are letters, lies the fascination of Art Brut letters.

Begin by approaching the safe zone constructed by each of the eight artists, looking for hints in the letters on how to enjoy them. Then, falling absorbed in the physical letters, let yourself wander between the written/drawn letters and among their lively lines and dots, and explore the Art Brut world of tangling unraveling letters.

Notes

1. Some examples of art exhibitions abroad are as follows: *Écrits bruts*, Collection de l’Art Brut (Lausanne, 1979); *Wunderhülsen & Willenskurven. Bücher, Hefte und Kalendarien*, Sammlung Prinzhorn (Heidelberg, 2002), Galerie im Stadtmuseum Jena (Jena, 2002); *Écriture en délire*, Collection de l’Art Brut (Lausanne, 2004), Halle Saint Pierre (Paris, 2005), Musée International d’Art Naïf Anatole Jakovsky (Nice, 2005); *Do the Write Thing: Read Between the Lines*, christian berst art brut (New York, 2014; Paris, 2018). Exhibitions in Japan include *Moji-Moji-Sho* (MOB Museum of Alternative-Art, Tochigi, 2003), *Exercises of Style* (Tomonotsu Museum, Hiroshima, 2018), and *Moji-Moji-Kotonoha* (Borderless Art Museum NO-MA, Shiga, 2021).
2. In 2020, *Scrivere Disegnando. Quand la langue cherche son autre* was held as a large-scale collaborative exhibition with Collection de l’Art Brut at Centre d’Art Contemporain Genève. In the same year, Lucienne Peiry published *Écrits d’art brut: Graphomanes extravagants* (Paris: Éditions du Seuil, 2020). Both occasioned further observations on this subject.

Artists' Biographies

MATSUMOTO Kunizo

Born in Osaka Prefecture in 1962, MATSUMOTO Kunizo began to trace numbers and letters while helping his family with their Chinese restaurant near Osaka's Tsutenkaku Tower. This led to a daily routine of writing letters around 1985. Through his participation in the studio group "Atelier Hiko" in Osaka City starting in 1995, he seemingly found enjoyment in communicating with letters. Choosing letters from materials related to the kabuki performances he enjoys with his family, the tea ceremony, boys idol groups, and other interests, he transcribes them on any piece of paper handy. Sending letters to people is also a lifework for Matsumoto, who believes that writing will bring good fortune. Such is his enthusiasm, he fills both sides of an envelope and even the address label densely with letters. As he has learned and mastered the letters, habitual flourishes and elements of disorder have appeared, and he is now evolving to cursive-like handwriting. Matsumoto's figure as someone motivated to live by entrusting his thoughts and feelings to letters is apparent from his layers of fine dots and lines among which the letters themselves are barely discernable. Recent exhibitions include *Scrivere Disegnando. Quand la langue cherche son autre* (Centre d'Art Contemporain Genève, 2020). His works can be found in the Collection de l'Art Brut in Lausanne and other collections. [SM]

SHINJO Senna

Born in Okinawa Prefecture in 1990, SHINJO Senna as a child felt a strong affinity with numbers. This shifted to an interest in letters, and she took to pointing out letters on signs as a means of communication. When forming a letter, she especially liked placing it in a circle, a preference eventually leading her to draw a line around the letter to make it decorative. Thus was born Shinjo's characteristic letter style. Viewing a Shinjo work, we will see that she first writes a kana character as an axis line. She then loops a line around the character, following its shape, to flesh it out. The fleshed out lines become shapes like long circles or crescent moons and form a picture resembling a complexly tangled mesh. We can just barely discern the Japanese kana characters "の (no)" and "み (mi)" in the mesh. Many of the letters that appear derive from the names of family members and people close to her. After starting out with multi-colored works, mixing in motifs other than letters, she in recent years shifted to working entirely with letters using restrained colors. Following *Art Camp 2017: Naive Cannon* (Art Gallery, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 2017), Shinjo has exhibited in Okinawa often. [SM]

NISHIYAMA Tomohiro

Born in Hiroshima Prefecture in 1974, NISHIYAMA Tomohiro lives at the "Ayumi-en" in Fukuyama City. He draws vertical and diagonal lines, crisscrossing their ends to create letters that look like patterns. Employing this method of his own invention, he has kept a journal of his day-to-day car-washing and cleaning activities, and other happenings. When writing his journal (an activity currently suspended), Nishiyama as a rule begins with the day's date and closes with the notation, "終。 (End.)". He also draws a particular character in a similar form each time. Knowing this, it becomes somewhat possible to decode his texts. As he writes the characters, he looks for lines or shapes he can extend for tying with other characters, and performs this action repeatedly. Because he draws lines unhesitatingly with strong pressure, ripped areas appear where the dark ink has pooled. Nishiyama's characters are typically bunched in the upper left of the paper, their angular *kanji* lines and rounded *kana* lines extended and entangled. Even after unraveling the characters to read and understand their meaning, viewers remain mesmerized by the striking patterns they form. Major exhibitions include *POCORART Declares! 2014* (Arts Chiyoda 3331, Tokyo, 2014) and *Exercises of Style* (Tomonotsu Museum, Hiroshima, 2018). [KY]

NISHIKAWA Takumi

Born in Kanagawa Prefecture in 1986, NISHIKAWA Takumi has since around 2000 participated in the studio group "atelier panpaki" currently active in Yokohama. It was when experimenting with paint colors on a water-repellent medium that Nishikawa discovered a method of mixing soapy water with watercolor paints by a formula of his own. Using this method, he composes pictures featuring motifs ranging from computer-game castles and World Heritage buildings to sweets and other edibles, drawing each motif from his own perspective. Even with watercolors, he achieves a moist-looking texture and brilliant colors because of the moderate volume of oil in the soap. Nishikawa is also particular about the paper's texture, and in recent years, he sometimes makes his own paper. After completing the coloring of his motifs and photographing the work, he invariably adds text to his picture, copied from travel guides, recipe websites, and such. Above the text, he carefully inscribes *furigana* (phonetic characters indicating pronunciation). Finding his own rhythm, he sometimes repeats the same words, and his sequences of *kanji*, *hiragana*, alphabet letters, and numbers, all arranged in a good balance, often extend to the back side. Major exhibitions include *Fellow Art Gallery vol. 11, NISHIKAWA Takumi "Welcome to the World of Soap Art"* (Art Forum Azamino, Kanagawa, 2013), and *POCORART National Open Call Exhibition vol. 9* (Arts Chiyoda 3331, Tokyo, 2020). [SM]

KISHABA Moriya

Born in Okinawa Prefecture in 1979, KISHABA Moriya began creating art at home in the 1990s. He has been a participant in "Wakatake Art" in Urasoe City since around 2002. Amid his childhood enjoyment of looking at newspapers and dictionaries, Kishaba memorized Chinese characters and eventually took to writing the characters in a grid-like formation on the continuous stationery his father was using. In many cases, his writing stops with a mistake or on sudden impulse, and the resulting picture is characterized by the shape of the margins and density of the characters. In his *Untitled (Kanji Series)* we can sense his methodical care in locating each rounded character and the time he invests in working. In *Zukan*, on the other hand, the expression differs. Here, he converts Japanese *kana* characters into *kanji* characters and letters of the alphabet, and fills in the white space with letters. In recent years, Kishaba is expanding his creative territory, having shifted from writing characters to making dots with oil-based pen ink and arraying squares drawn in colored pencil. He has exhibited his works in many shows in Japan and abroad, including *Japon* (Collection de l'Art Brut, Lausanne, 2008-09). His work is published in *Nihon Bijutsu Zenshu* (Complete Works of Japanese Art), vol. 20 (Tokyo: Shogakukan, 2016). [KY]

TOMIZUKA Yoshimitsu

Born in Hyogo Prefecture in 1958, TOMIZUKA Yoshimitsu has created art at the "Suzukake Art Club" in Nishinomiya City since around 1993. Known for his calm personality, Tomizuka creates stories and illustrations eloquently from memory and his own imagination on sheets of newspaper and *washi* paper. The letters are inserted between monochromatic lines along with sketches painted with small strokes in pale and bright pastels. Because of the speed in which they are rendered, the letters and pointillist drawings are in a flowing style, and Tomizuka himself apparently has difficulty deciphering them sometimes. In *Art Brut* abroad, we often encounter imaginative stories not premised on being read. Tomizuka's work is certainly of this style. The appeal of his stories, such as his eleven-episode "The Tale of the Blue Mountains," is the grandeur and harmony of a picture in which figures and letters commingle and colors overlap. Tomizuka's style of freely painting figures and colors, as he likes, over dense black newspaper lines recalls the free-spirited lifestyle of Tora-san, his favorite movie character who often appears in his pictures. Tomizuka's works have appeared in *Japon* (Collection de l'Art Brut, Lausanne, 2008-09) and numerous other exhibitions in Japan and abroad. His works are collected by Collection de l'Art Brut and other collections. [KY]

SAKUTA Yuichi

Born in Okinawa Prefecture in 1987, SAKUTA Yuichi has been creating energetically at home since around 2004. When using paint in a painting circle as a junior high school student, Sakuta applied paints of many colors, one over another, without waiting for them to dry. At that time, he was encouraged to try collage, and he arrived at his style of cutting shapes from colored paper and spontaneously gluing them. Combining words and signs he has observed, he glues them on a drawing paper panel prepared by his mother. Words having deep personal meaning—such as the name of the cafeteria ("Najimi") he often visited with his family and his sister's name ("Shizuka")—appear repeatedly in his works, as do letters and shapes of signs seen on trains, at construction sites, and at facilities. When attaching colored paper in multiple layers, Sakuta applies glue copiously over the entire backing. As a result, cracks have appeared in recent years where the glue is layered, producing a rich appearance that blends with the foundation color. Sakuta has frequently shown works at exhibitions in Japan and abroad, including *Art Brut Japonais* (Halle Saint Pierre, Paris, 2010-11). His work is published in *Nihon Bijutsu Zenshu* (Complete Works of Japanese Art), vol. 20 (Tokyo: Shogakukan, 2016). [KY]

Harald STOFFERS

Born in Hamburg, Germany in 1961, Harald STOFFERS in 1999 began writing letters to his mother, whom he lived with. He has since written her every day, always opening his letter with the words, "Liebe Mutti (Dear Mummy)." He has worked in the "Atelier der Villa" attached to a vocational facility since 2001. After first carefully drawing horizontal lines, Stoffers fills in letters, writing on or between the lines. The distinctive colons and German umlaut symbols he uses, according to his own rules, impart rhythm to his captivating rows of lines and letters. Stoffers writes letters having fixed content, requesting his mother to take certain trousers out for him to wear for work on a particular day and so on, which he repeats in a number of variations. The letters are, for a certain, addressed to his mother, yet in time, Stoffers has made them a routine, it seems, simply due to the comfort he enjoys in writing them. Although originally consisting of brief paragraphs, often torn from the page when completed, Stoffers' letters have grown massive in recent years, sometimes reaching over four meters in height. His works can be found in the Collection de l'Art Brut in Lausanne and other collections. [SM]

主要参考文献

【展覧会カタログ】

『このアートで元気になる——エイブル・アート'99』展カタログ、東京都美術館、1999年。

Écriture en délire, exh. cat., Collection de l'Art Brut, Milan: 5 Continents Éditions, 2004.

Art brut du Japon, exh. cat., Collection de l'Art Brut, Lausanne-Gollion: INFOLIO, 2008.

『アール・ブリュット・ジャポネ』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、2011年。

『アートキャンプ2013展 素朴の大砲』カタログ、浦添市美術館、2013年。

Do the Write Thing: Read Between the Lines, exh. cat.,

christian berst art brut, New York, Paris: christian berst art brut, 2014.

『アートキャンプ2015 in 宮古島 アール・ブリュットとの出会い展』カタログ、宮古島市中央公民館、2015年。

『すごいぞ、これは!』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、心揺さぶるアート事業実行委員会、2015年。

『沖縄県障害者社会参加支援事業 アートキャンプ2016 in 八重山 アール・ブリュットとの出会い展』カタログ、石垣市民会館、2016年。

『沖縄県障害者社会参加支援事業 ART CAMP 2018 in 名護 アール・ブリュットとの出会い展』カタログ、沖縄県名護市民会館、2018年。

Do the Write Thing: Read Between the Lines #2, exh. cat.,

christian berst art brut, Paris: christian berst art brut, 2018.

『沖縄県障害者社会参加支援事業 ART CAMP 2019 展 表現することの根源へ』カタログ、佐喜真美術館、2019年。

『文体の練習』展カタログ、鞆の津ミュージアム、2019年。

『ドローイングの可能性』展カタログ、東京都現代美術館、2020年。

Andrea BELLINI and Sarah LOMBARDI, eds., *Writing by Drawing: When Language Seeks Its Other*,

exh. cat. (English edition), Centre d'Art Contemporain Genève, Milan-Paris-Geneva: Skira Editore, 2020.

【その他図書】

はたよしこ編『DNA パラダイス 27人のアウトサイダーアーティストたち』日本知的障害者福祉協会、2003年。

Peter HEIDENWAG, ed., *Harald Stoffers: Briefe, Frankfurt am Main: Revolver, 2004.*

小出由紀子『アール・ブリュット パッション・アンド・アクション』求龍堂、2008年。

はたよしこ編『アウトサイダー・アートの世界——東と西のアール・ブリュット——』紀伊國屋書店、2008年。

保坂健二郎監修、中村政人編『アール・ブリュット? アウトサイダー・アート? ポコラート! 福祉×表現×美術×魂』3331 Arts Chiyoda、2013年。

中村政人『ポコラート宣言』3331 Arts Chiyoda、2015年。

ミシェル・テヴォー、杉村昌昭訳『誤解としての芸術——アール・ブリュットと現代アート——』ミネルヴァ書房、2019年。

Lucienne Peiry, *Écrits d'art brut: Graphomanes extravagants*, Paris: Éditions du Seuil, 2020.

*上記文献のほか、各作家、関係者へ行ったインタビュー内容も参考にした。

写真クレジット Photo Credit

写真撮影・提供 Photographer and Courtesy

柿島達郎／KAKISHIMA Tatsuro (pp. 12-21, 26-37, 40-43, 46-49)

大西暢夫／ONISHI Nobuo (pp. 38-39)

社会福祉法人 創樹会／Social welfare corporation Soujukai (pp. 22-25)

小出由紀子事務所／Yukiko Koide Presents (pp. 44-45)

日本財団／The Nippon Foundation (pp. 38-39)

関連イベント

・アーティストトーク [会期中にオンライン配信]

登壇者：朝妻彰 (アートキャンプ2001実行委員会 代表)、

富塚純光、三栖香織 (社会福祉法人一羊会 あとろえすずかけ・すずかけ絵画クラブ 職員)、

神田浩平 (社会福祉法人一羊会 広報)、

西川匠、いまぜき まり (アトリエ・パンパキ 世話役)、

西山友浩、津口在五 (鞆の津ミュージアム 学芸員)、

松本国三 [都合により欠席]、石崎史子 (アトリエひこ スタッフ)

・トークイベント「文字をほどく」 [会期中にオンライン配信]

登壇者：麻見和史 (小説家)、

大原大次郎 (グラフィックデザイナー)、

西塚涼子 (タイプフェイスデザイナー、アドビ株式会社)

・学芸員によるギャラリートーク [手話通訳付]

会期中に当ギャラリーにて開催

Related Events

・Artists' Talk 【Online streaming during the exhibition period】

ASATSUMA Akira (Representative, Art Camp 2001 Organizing Committee)

TOMIZUKA Yoshimitsu, MISU Kaori (Staff Member, Ichiyou-kai, Atelier Suzukake, Suzukake Art Club)

and KANDA Kohei (PR, Ichiyou-kai)

NISHIKAWA Takumi and IMAZEKI Mari (Caretaker, atelier panpaki)

NISHIYAMA Tomohiro and TSUGUCHI Akigo (Curator, Tomonotsu Museum)

MATSUMOTO Kunizo [Unable to attend due to circumstances] and ISHIZAKI Fumiko (Staff Member, Atelier Hiko)

・Talk Event “Unraveling the Letters” 【Online streaming during the exhibition period】

ASAMI Kazushi (Author)

OHARA Daijiro (Graphic Designer)

NISHIZUKA Ryoko (Typeface Designer, Adobe Japan)

・Curators' Gallery Talk [with sign-language interpreting]

アール・ブリュット ゼン&ナウ 2021
レターズ ゆいほどける文字たち

[展覧会]

企画・運営：佐藤真実子、小山紫（東京都渋谷公園通りギャラリー）

広報物デザイン：大原大次郎

広報物印刷：関東図書株式会社

関連イベント等動画撮影・編集：梶山紘二

[カタログ]

企画・執筆・編集：佐藤真実子、小山紫

編集統括：大橋稔

翻訳：ブライアン・アムスタッツ（アムスタッツ・コミュニケーションズ）

デザイン：大原大次郎

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行日：2021年4月9日

Art Brut Then & Now 2021
LETTERS Tangling Unraveling

[Exhibition]

Curators: SATO Mamiko, KOYAMA Yukari (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Publication Design: OHARA Daijiro

Publication Printing: Kanto Tosho Co., Ltd.

Video Shooting and Editing (Related Events): KAJIYAMA Koji

[Catalogue]

Texts: SATO Mamiko, KOYAMA Yukari

Editorial Direction: OHASHI Minoru

Editing: SATO Mamiko, KOYAMA Yukari

Translation: Brian AMSTUTZ (Brian Amstutz Communications)

Design: OHARA Daijiro

Printed by: Yamada Photo Process Co., Ltd.

Published by: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date: April 9, 2021

Artwork © The Artist

© 2021 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

未来をつなげる。未来をつなげる。
THE FUTURE IS ART

TokyoTokyo
FESTIVAL